



Data

監督・脚本・製作: クエンティン・タランティーノ

出演: レオナルド・ディカプリオ / ブラッド・ピット / マーゴット・ロビー / アル・パチーノ / ダコタ・ファニング / ジェームズ・マースデン / ルーク・ペリー / ティム・ロス / マイケル・マドセン / カート・ラッセル / エミール・ハース / ティモシー・オルフアント

👁️👁️ みどころ

「むかし、むかし・・・」で始まる物語は多いが、今から50年前の1969年を舞台とした、タランティーノ監督が描く『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド』とは？

日本でもアメリカでも、50年代は映画とTVドラマが娯楽の王様だったが、その中で育った1963年生まれの多感なタランティーノ少年は、本作の焦点を「シャロン・テート殺害事件（マンソン事件）」に！

もっとも、本作の主人公は落ち目の俳優リックとスタントマンのクリフ。2大スターの役柄には不釣り合いだが、それがタランティーノ流！しかして、本作クライマックスで描かれるシャロン・テート殺害事件類似の(?)大事件とは？

本作は日本人の知らない情報がドッサリだから、パンフレットやネットを駆使して各シークエンスの背景事情をしっかりと勉強したい。



■□■私の1969年は？タランティーノの1969年は？■□■

1949年生まれの私の1969年は、ちょうど20歳の年。また、2019年の今年に70歳を迎えた私にとっては、ちょうど50年前の年。そういう意味で、私の1969年はエポックメイキングな年であり、「ワンス・アポン・ア・タイム・イン・坂和章平」に物語を綴っていけば、いくらでも・・・他方、監督2作目の『パルプ・フィクション』（94年）でカンヌ国際映画祭の最高賞パルム・ドール、アカデミー賞の脚本賞を受賞し、時代の寵児になったクエンティン・タランティーノ監督は1963年生まれだから私より14歳も若い。

テネシー州で生まれたタランティーノ監督の父親は俳優で音楽家。また、16歳で未婚のまま彼を生んだ母親はアイルランド系アメリカ人でチェロキー族の血も引いているようだ。そんな母親は彼が生まれてから間もなく音楽家と結婚したため、以降彼は実父には一度も会ったことがないらしい。しかし、彼は大きな映画マニアである母親と一緒に映画を観て育ったようだ。さらに、レンタルビデオショップの店員時代に、彼は大量の映画に埋もれ働きながら脚本を書いていたため、主にアジアを中心としたマニアックな映画、日本のアニメ・音楽に精通している。そのことは『キル・ビル〜KILL BILL〜Vol.1』(03年)、『シネマ3』131頁)、『キル・ビル〜KILL BILL〜Vol.2』(04年)、『シネマ4』164頁)を見れば明らかだが、そんなタランティーノ少年にとっての1969年のハリウッドは？

当時6歳だった彼にとって、その時代のハリウッド映画はリアルタイムで観たものではない。しかし、パンフレットにある監督インタビューによると、「ぼくが子どもの頃、母さんが運転する自動車の窓から観たロサンゼルス風景がこの映画の原点」らしい。そのため、『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド』と題されたタランティーノ監督の第10作目となる本作には、彼が小学生の頃学校から帰ってきて夕方再放送で見ていたというあの頃のテレビ西部劇が次々と登場するので、それにも注目！

■■■主役はリックとクリフ。彼らの時代は？今の彼らは？■■■

本作の主役は、TV西部劇『賞金稼ぎの掟』で主役を演じて有名になった男・リック・ダルトン(レオナルド・ディカプリオ)と、そのスタントマンで相棒の男・クリフ・ブース(ブラッド・ピット)だ。1969年の今、リックはかつての栄光を失い、ドラマの悪役やゲスト出演等の単発の仕事で食いつないでいた。そのため、リックは長い間コンビを組んできたスタントマンの親友クリフに仕事を回してやる余裕もない状態だ。ところが、リックはプライドだけはまだ一流だから、映画のプロデューサーのマーヴィン・シュワーズ(アル・パチーノ)から「イタリア製の西部劇に出てみないか？」と誘いを受けても、「都落ちのような仕事はしたくない」とはねつけていた。他方、クリフもそんな友人を黙って見守りつつ、TVドラマ「グリーン・ホーネット」の撮影現場で出演者のブルース・リーと大変なめごとを起こしたため、以降仕事を干され気味だった。ある、ある、こんな話……

ちなみに、23歳で出演した『タイタニック』(97年)で、まばゆく輝くような美しさを見せたレオナルド・ディカプリオも、今では45歳。そんな彼はいろいろな映画で男臭く貫禄のある役を立派に演じているから、ホンモノの彼は今なお俳優として成長途上にあり、決して落ちぶれていない。それはクリフ役で出演したブラッド・ピットも同じだ。そのため、現在ハリウッドのトップ俳優であるレオナルド・ディカプリオとブラッド・ピットが本作のような映画で本作のような役を演じるのは少し違和感があるが、その逆に興味深い面もある。もちろん、タランティーノ監督はそれを狙ってこの“ビッグ2”を起用したわけだが、さて、彼らの落ち目ぶりの演技は如何に……？

もっとも、スタントマン兼雑用係として運転手もしているクリフが運転するリックの車は立派なもの。また、リックが住んでいる自宅もシエロ・ドライブにあるプール付きの豪邸だから、それに注目！他方、その豪邸まで自らの運転でリックを送り届けたクリフは、そこに停めてある自分の小さな車で愛犬ブランディと共に暮すトレーラーハウスに入っていったから、2人の格差は明らかだ。

そんな2人の男を主役とした本作の物語は、1969年2月8日から始まる。その日のテレビでゲスト出演したリックは、かつてのTVドラマの主役での活躍を懐かしげに語っていたが、そんな番組の出演料はごく僅か。TVドラマの主役とは雲泥の差があるはずだ。私の1969年2月は大学2回生の終わり。入学以来没頭していた学生運動も1968年の全学封鎖によって授業すら行われなくなっていた時代だ。そんな中で、ちょうど20歳になったばかりの私は、自分の今後の人生を模索していたが、本作に見る落ち目の俳優リックの場合は？そして、そのスタントマンのクリフの場合は？

■□ 『ローズマリーの赤ちゃん』の衝撃は？ □■

1967～69年のハリウッドを代表する映画として、「映画検定公式テキストブック（キネマ旬報映画総合研究所編）」の「見るべき映画100本 外国映画編」に選ばれているハリウッド映画は、『俺たちに明日はない』（67年）、『卒業』（67年）、『2001年宇宙の旅』（68年）、『猿の惑星』（68年）、『明日に向かって撃て！』（69年）、『イージー・ライダー』（69年）、『ワイルドバンチ』（69年）の7本。また、「週刊20世紀シネマ館」のハリウッド映画の名画として、「1967年の名画」では、『夜の大捜査線』が、「1968年の名画」では、『俺たちに明日はない』『2001年の宇宙の旅』『卒業』『ロミオとジュリエット』が、そして「1969年の名画」では、『真夜中のカーボーイ』『ローズマリーの赤ちゃん』『チップス先生さようなら』が挙げられている。このように、『ローズマリーの赤ちゃん』は1969年を代表するハリウッドの名画の1つだ。

私は同作を時々行っていた京都の名画座系の映画館で観たが、同作では「世界中の女の中からあなたは選ばれたの。悪魔の世継ぎの母親にと・・・」とささやかれた若妻が次第にやつれていき、透き通るような皮膚に静脈が浮き出てくるまでやせ細る姿が強烈だった。そんな若妻ローズマリー役を演じたのが、歌手フランク・シナトラの妻で、当時テレビドラマの人気者だった23歳の女優ミア・ファローだった。同作が大ヒットしたのは、第1にミア・ファローの熱演だが、第2は、同作の監督としてハリウッドに招かれたポーランド人のロマン・ポランスキーの演出。「恐怖映画の定石だった奇抜でグロテスクな特殊効果や、大げさな演出方法をいっさい排し、妊娠により情緒不安定となった若妻が体験する数々の不気味で不可解な事件を、淡々と、しかしリアルに積み重ねた」ことによって、同作は同年のアカデミー脚本賞（脚色賞）にノミネートされている。ちなみに、私がホラー映画を嫌いになった（観るのが恐くてイヤになった）のは、学生時代に同作を観たのが1つの

理由。したがって、同作は大ヒットしたものの、功だけではなく、罪の部分もあったかも・・・？

■□■本作のテーマはマンソン事件！それって一体ナニ？■□■

それはともかく、タランティーノ監督は『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド』と題した本作に、今は落ち目となったが、なおシエロ・ドライブにある大邸宅にしがみついているリックの隣に、ロマン・ポランスキー監督（ラファウ・ザヴィエルチャ）と、その妻のシャロン・テート（マーゴット・ロビー）が引っ越してくるという物語を設定するとともに、1969年に起きた「シャロン・テート殺害事件」を本作のクライマックスに据えた。本作は、どこまでがホントの話で、どこまでが作り話かの境界線が紛らわしいが、『ローズマリーの赤ちゃん』で大成功をおさめたロマン・ポランスキー監督が、妻のシャロン・テートと共に、ハリウッドのセレブが集まる大邸宅に引っ越してきたのはホントの話。また、1969年8月8日（犯行は日付が変わった9日深夜）に、「マンソン事件」とも呼ばれている「シャロン・テート殺害事件」が発生したのもホントの話だ。

1969年は、ベトナム反戦を中心とする政治テーマが、日米両国の若者たち共通の関心事だったが、コト映画ネタに関しては、日本の若者のそれ、とりわけ全共闘諸君のそれは断然高倉健であり、彼が主演した『昭和残侠伝』だった。1968年11月22～24日の第19回東大駒場祭（大学祭）では、その「とめてくれるなおっかさん 背中のおちょうが泣いている 男東大どこへ行く」と書いたポスターが貼られ、高倉健が歌った「義理と人情を秤にかけりゃ」で始まる『唐獅子牡丹』の曲が、あちこちで歌われた。これは、1968年10月に東大闘争の活動家の1人として参加した私の体験談だ。

それに対して、タランティーノたち当時の米国の若者にとってのそれは『ローズマリーの赤ちゃん』であり、シャロン・テート殺害事件だったらしい。本作で、白のミニスカートがよく似合うシャロン・テートを演じたのは、『アイ、トーニャ 史上最大のスキャンダル』（17年）（『シネマ42』56頁）でアカデミー賞主演女優賞にノミネートされたマーゴット・ロビー。同作では、フィギュアスケート選手トーニャ・ハーディングの悪役っぷりが顕著だったが、本作ではそれと打って変わって、シャロン・テートの愛くるしさと優しさが前面に！さあ、今から50年前のハリウッドを「むかし、むかし・・・」で物語る本作はどんな展開に・・・？

■□■リックって意外にいい奴！対するクリフも意外に・・・■□■

映画制作の現場を描いたメチャ面白い映画が、深作欣二監督の『蒲田行進曲』（82年）だったが、本作でもハリウッドの映画制作の現場が登場するので、それに注目！今でも京都にある太秦映画村には、時代劇やチャンバラ撮影のためのセットがたくさん置かれているが、リックやクリフが出入りしているハリウッドの撮影所には、西部劇のためのそれが

あちこちに。

若手俳優ジェームズ・ステイシー（ティモシー・オリファント）が主演するTV西部劇「対決ランサー牧場」のパイロット版で悪役に起用されたリックは張り切ってセリフを覚え、撮影に臨んだが、前夜に酒を飲みすぎたためか、大失敗。自己嫌悪に陥ったリックが一休みしている時に、セットで出会った少女トルーディ（ジュリア・パターズ）に話しかけていると、思わずせき止めていた感情が一気に溢れ出ることに。いい歳をした中年男が子役の少女に慰められている風景は少し異様だが、そんな姿を見ていると、今でもあちこちで肩で風を切って歩いているように見えるリックは、意外にいい奴……。誰もがそう思うはずだ。

他方、若い時から大スターだったリックに対して、若い時のクリフは戦場で何人も人を殺してきたらしいから、度胸は座っている。そのため、本作導入部で彼が見せるブレイク前のブルース・リー（マイク・モー）とのやりとり（決闘？）は、ブルース・リーのファンからはブーイングが出そうだが、見ていると結構面白い。また、しががないスタントマンをしていても、クリフはリックとトコトン深いところで信頼し合っているようだから、そんな“男の友情”はいいものだ。そんな男だから、屈強なブルドッグ犬のブランディも、トコトン飼い主のクリフを信頼しているようだし、リックもスタントマンとして以上に親友としてクリフに接していることがよくわかる。

そこで気になるのは、クリフがリックを降ろして1人でリックの車を運転している時、1度ならず、2度、3度と顔を合わせるヒッチハイカーのヒッピー少女ブッシーキャット（マーガレット・クアリー）だが……。

■□■マンソン・ファミリーとは？クリフの武勇伝の可否は？■□■

1969年8月9日の未明、ハリウッドのセレブが住むシエロ・ドライブにあるロマン・ボランスキーの邸宅で、妻のシャロン・テートを含む5人の男女が殺害された。母屋で殺されていた4人はいずれもボランスキーの友人で、金と力と美貌と若さを兼ね備えたハリウッドの上流階級の人々だった。また、そんな衝撃の後、2度目の本当の衝撃はその後にやってきた。つまり、五里霧中だった捜査に思わぬところから突破口が訪れたのは、別件で逮捕されていた女性スーザン・アトキンスが、「シャロン・テートを殺したのは自分だ」と同房者に吹聴しているのがわかったため。そして、翌年3月、スペイン映画牧場を根城にしていたチャールズ・マンソン率いるヒッピー集団が逮捕された。そして、マンソンの命を受け、テックス・ワトソン、アトキンスら4人がボランスキー邸を襲ったことが判明した。パンフレットにある、柳下毅一郎氏（特殊翻訳家、映画評論家）の「シャロン・テート殺害事件とチャールズ・マンソン」によれば、日本人はあまり知らないだろうが、これらはホントにホントのお話らしい。

タランティーノ監督が、「むかし、むかし、ハリウッドにこんなお話があったとさ……」

と語る本作のテーマにそれを設置したのは、それほど、「シャロン・テート殺害事件」の衝撃が大きかったためだ。しかし、クリフが3度目に会った女の子プッシー・キャットを車に乗せて送っていったのは、彼女が仲間と暮しているというスペイン映画牧場。そこは、クリフにとってもなじみ深い撮影地の1つだったが、怪しい予感を覚えながら牧場にたどり着くと、そこには赤毛の女スキューキー・フロム（ダコタ・ファニング）や、マンソン・ファミリーを率いるリーダーのチャールズ・マンソン（デイモン・ヘリマン）らが出た。彼らは地主からこの土地を借りていると言っていたため、クリフが彼らの制止を無視して、昔の友人であるその地主に会ってみると・・・？そこでクリフが見せた“武勇伝”（？）は仕方のないものかもしれないが、さて、その可否は・・・？

■□■自分の出演作を顔パスで！有名女優にはこんな一面も■□■

日本では、引っ越しに伴う“向こう三軒両隣り”への手みやげを持参しての“ご挨拶”が不可欠。しかし、本作を観ていると、リックもクリフもいつの間にか隣りに引っ越してきているのがロマン・ポランスキー監督とシャロン・テート夫婦だと知ってビックリしていたから、ロマン・ポランスキーは“お隣りさん”に引っ越しの挨拶をしていないことになる。リックも別段それを気にしている（怒っている）ことはないようだから、アメリカでは、またハリウッドのセレブたちの常識では、そんなもの・・・？

本作では、ロマン・ポランスキー監督の仕事ぶりや私生活は何も描かれませんが、引っ越してきた後、ある休日を1人気ままに過ごす女優シャロン・テートの姿が描かれる。彼女にはミニスカートとブーツ姿がお似合いだが、もちろんいつも同じファッションをしているわけではない。本作では、地味な普段着（？）で町を歩いていた彼女が、通りがかった映画館でかつて自分が出演した映画が上映されていることを知り、顔パスでそこに入り一人でそれを観賞するというシークエンスが描かれる。そこで、彼女はスクリーン上に映る自分の姿を再確認するとともに、観客が感嘆の声をあげたり拍手をしたりするたびに、満足気な笑顔を見せるので、有名女優のそんなちょっとした日常風景を楽しみたい。こんな無邪気なシャロンを見ていると、その半年後にあんな冷酷な運命が待ち受けているとは到底思えない。したがって、タランティーノ監督は本作クライマックスの凄惨なシャロン・テート事件をより際立たせるために、あえて彼女のこんな幸せそうな一面を強調！

そう思っていたが、タランティーノ監督が本作のクライマックスで描く、シャロン・テート事件（＝マンソン事件）とは・・・？

■□■大邸宅の警備は？クリフは不死身？いやいや・・・■□■

本作導入部では、クリフの運転する車に乗ったリックが、シエロ・ドライブにある邸宅に戻ってきた時、私は一瞬こんな大邸宅の警備はどうなっているの？と心配したが、本作後半からクライマックスにかけてそれが現実のものになっていくので、それに注目！今の

日本では、「アルソック」のTVコマーシャルが有名だが、その他にも警備保障を請負う会社は多い。また、中国ほどではないにしても、大邸宅には監視カメラが多数設置され、セキュリティは万全のものとされているはず。しかし、1969年当時のシエロ・ドライブにある大邸宅はそうでもなかったらしい。だって、監視カメラは1台もないし、警備員の一人も置いていないのだから。

自宅の敷地内にボロ車のエンジン音を響かせながら入ってきたヒッピー風の男を発見したリックは、酒ビンを持ったガウン姿のまま外に出て、男に対して悪態を浴びせ、「すぐに出ていけ！」と命令していたが、警備員もいない状況でこんなトラブルを起こすと、かえってヤバイのでは・・・？だって、相手は失うものが何もないヒッピー男なのだから、リックの罵詈雑言にカッとなって刃向かってきたらどうなるの？誰でもそう心配するはずだが、人気俳優として長年チャホヤされてきたリックは、そんな心配をしないらしい。

1969年8月8日の夜、リックは一人ヘッドホンを付けて音楽を聴きながら、プールに浮かべた浮き輪の上に寝そべて至福の時間を過ごしていた。その時、クリフは邸宅の中のダイニングルームに愛犬ブランディと共にいたが、そこに密かに忍び込んできたのがマンソン・ファミリーの男たちだ。彼らは、あの時スペイン映画牧場に乗り込んできたクリフによって仲間の1人が傷つけられたことを恨み、その復讐にやってきたようだが、さて、彼らはどんな手口でどんなことを？ブルース・リーとの“決闘”を見ても、スペイン映画牧場での“武勇伝”を見ても、さらにリックから頼まれて軽々と屋上に上がりアンテナを修理する姿を見ても、かつては戦場で何人も殺してきた体験を持ち、今でも危険の多いスタントの仕事を軽々とこなすクリフは格闘に強く、不死身の男のように思えたが、さて・・・？

しかして、ロマン・ポランスキーの大邸宅ではなく、リックの邸宅で起きるシャロン・テート殺害事件ならぬ、マンソン・ファミリーの襲撃事件の全貌は如何に？なるほど、これが今から50年前の1969年を舞台とした、タランティーノ監督の「ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド」・・・？

2019（令和元）年9月13日記